コナン・ドイル「ライオンのたてがみ」論

大渕　利春

はじめに

「ライオンのたてがみ」（'The Adventure of the Lion's Mane'）の初出は1926年の『ストランド・マガジン』で、翌年シャーロック・ホームズものの最後の短編集『シャーロック・ホームズの事件簿』（*The Case-Book of Sherlock Holmes*）に収録された。

本作ではホームズは既に探偵業を引退しており、事件の記録役のワトソンは登場しない。そのため、ホームズの一人称で語られる珍しい作品である。一般的な本作の評価は低く、現代イギリスを代表するミステリ作家、コリン・デクスターも本作を酷評している。[(1)] だが、ドイル自身は本作を高く評価していた。

「ライオンのたてがみ」は以下のような物語だ。ホームズは隠遁先の南イングランド・サセックスの海辺を散歩中、瀕死の男を発見する。男の体にはミミズ腫れの傷があり、男は「ライオンのたてがみ」と言って絶命する。その男・マクファーソンには結婚を約束した女性・モードがいた。一方、マクファーソンと同じ学校で働くマードックという男もモードに恋していたため、警察はマードックを犯人と疑う。しかし、犯人はキュアネラ・カピラータという有毒のクラゲであった。

1．クラゲについて

動物が犯人というアイディアは、近代ミステリの祖とされるエドガー・アラン・ポウの「モルグ街の殺人事件」の犯人がオランウータンであったよう

に、さして目新しいものではない。しかし、クラゲという当時のイギリス人には比較的馴染みの薄い動物を犯人にしたところに本作の新味がある。しかし、現代の読者にとっては、真犯人がクラゲであったという真相は物足りないのではないか。日本でもカツオノエボシなどの猛毒を有するクラゲによる死亡事故が発生していて、幻想的な外見とは裏腹に、クラゲが危険な生物であるという認識は多くの現代人によって共有されていると思われる。

クラゲはアリストテレスの『動物誌』やプリニウスの『博物誌』にも登場しており、ヨーロッパ人は古代からクラゲの存在を認識していた。とはいえ、島国に暮らし、海が身近な存在であったイギリス人にとっても、漁師でもなければ、実際にクラゲを目にすることは稀であっただろう。テレビもインターネットもない時代、人々が海の生物を知る主たる手段は図鑑であり、その歴史を見ても、水棲動物は陸に打ち上げられた状態で描写されるのが一般的であった。そのため、専門家でもない当時の一般の人々がクラゲの生態についての知識をもっていたかについては甚だ疑わしい。そもそも現代においてすら、クラゲの生態には解明されていない謎が多いとされる。

19世紀に入り、水棲生物の生態に対する関心が高まってくる。今日「水族館」の意味で用いられているaquariumという語を始めて用いた博物学者、フィリップ・ヘンリー・ゴスは水槽内で水棲生物を飼育する研究を行い、その成果を*Aquarium*という書物にまとめている。彼のFish Houseが今日の水族館に発展していくことになるのだが、ゴスは*Aquarium*において、浜辺に打ち上げられたクラゲをよく見かけると述べている。

コナン・ドイルが本作の執筆にあたり直接依拠したのは，J.G. ウッドの*Out of Doors*であり、作中でもホームズが言及する。ホームズは本書を読んでいたために事件の真相にたどり着くことができたと述べる。ウッドは次のように書いている。

> If the bather or shore wanderer should happen to see, either tossing upon the waves or thrown upon the beach, a loose, roundish mass

> of tawny membranes and fibres, something like a very large handful of lion's mane and silver paper, let him beware of the object, and, sacrificing curiosity to discretion, give it as wide a berth as possible. For this is the fearful stinger, scientifically called *Cyanea capillata*, the most plentiful and the most redoubtable of our venomous medusae.（*Out of Doors,* 140）

ウッドは浜辺でクラゲに遭遇して危うく命を落としかけたという自身の体験を綴っている。上記の引用にあるように、「ライオンのたてがみ」という表現もウッドに由来する。

ホームズはマクファーソンを死に至らしめたクラゲを見て上記の引用にある「キュアネア･カピラータ」と叫ぶ。このクラゲの正確な種はサイアエナ･クラゲであるとされる。これはラテン語の学名であり、和名はキタユウレイクラゲである。傘の大きさが２メートル以上にもなる世界最大級のクラゲで、日本の海にも生息している。イギリスでは北部の海に生息しているらしく、「ライオンのたてがみ」のように南イングランドの海で一般に見られるクラゲではない。また、このクラゲには人を死に至らしめるほどの毒はないようだ。[(2)] しかし、コナン・ドイルがクラゲの種に関する高度な知識を持っていたとも、その生態の細部に拘泥していたとも考えづらいため、ここではこうした矛盾は問題としない。ホームズは、犯人のクラゲについて次のように述べている。

> Cyanea cpillata is a micreant's full name, and he can be as dangerous to life as, and far more painful than, the bite of the cobra.（*The Case-Book of Sherlock Holmes* ,189）

本論文で注目したいのはクラゲの種ではなく、人を死に至らしめるほどの毒を有するクラゲがメドゥーサと呼ばれていたことである。

2　メドゥーサについて

作中にこの用語は出てこないものの、クラゲは英語でmedusaと呼ばれる。その由来には諸説あるようだが、浜に打ち上げられたクラゲが切り落とされたメドゥーサの首に似ている、と考えられたことが一因であるようだ。ウッドはクラゲについて述べた章に'Medusa and her Locks'というタイトルをつけている。また、ゴスもクラゲをmedusaと表記している。

メドゥーサ（Medusa）はギリシア神話に登場する怪物で、ゴルゴーンの三姉妹の一人。もとは美しい女性であったが、女神アテナの怒りを買い、醜い怪物にされてしまう。その髪は蛇でできていて、メドゥーサを見た者は石になってしまう。英雄・ペルセウスはアテナの助言を得てメドゥーサの首をはね、これを退治することに成功する。その後、ペルセウスはメドゥーサの首を使って怪物からアンドロメダを救出している。ロバート・グレイヴズはペルセウスのメドゥーサ退治の場面を以下のように記述している。

> He（Perseus）fixed his eyes on the reflection in the shield, Athene guided his hand, and he cut off Medusa's head with one stroke of the sickle.（Graves, 239）

このメドゥーサの神話は数あるギリシア神話のエピソードの中でもよく知られたエピソードといえるであろう。とりわけ、19世紀には、様々な文化にメドゥーサのイメージが現れる。例えば、ロマン派の詩人P・B・シェリーはメドゥーサをうたった詩をのこしているし[(3)]、ラファエル前派の詩人、D・G・ロセッティも「メドゥーサの相貌」なる詩をのこしている。絵画では、ベルギー象徴派のフェルノン・クノップフがメドゥーサの絵をのこしている。

世紀末のいわゆるデカダン文化の中で、とりわけメドゥーサは脚光を浴びる。シェリーの詩がそうであったように、デカダン派の芸術家たちの間では、メドゥーサの首は美と恐怖が混然一体となった存在であった。デカダン派に強い影響を与えた『ルネサンス』の著者、ウォルター・ペイターは、ウフィツィ

美術館所蔵の『メドゥーサ』に注目し、そこに腐敗の魅惑を見出した。なお、この絵は作者が不明であるが、19世紀にはレオナルド・ダ・ヴィンチの作と考えられていた。前述のシェリーの詩もこの絵をうたったもので、レオナルド・ダ・ヴィンチ作とする説に基づいている。

マリオ・プラーツは『肉体と死と悪魔　ロマンティック・アゴニー』の第１章を「メドゥーサの美」とし、メドゥーサの美を「汚辱の美」として考察している。19 ～ 20世紀の世紀転換期の女性嫌悪のイメージを収集したブラム・ダイクストラは、メドゥーサの首を女性嫌悪、女性恐怖の象徴であるとしている。当時、女性の権利拡大を求め、そのため男性の権威を脅かす存在と考えられた「新しい女」(new woman)と呼ばれる女性たちが登場していた。他方、90年代半ばのオスカー・ワイルド裁判によって顕在化したように、同性愛コミュニティの存在がイギリスにおいて認識され、男性の女性化への懸念も高まっていた。つまり、男女の性差が曖昧になった時代であり、伝統的な両性の役割分担を信奉する保守派からすれば、憂うべき事態が発生していたのである。男性を襲い、死に至らしめるメドゥーサは、ダイクストラの表現を借りれば、男性を捕食する男性化女性の象徴であった。メドゥーサは同時代の様々な文化で流行したファム・ファタールの一典型と言ってもよい。

精神分析の祖・フロイトは1922年に執筆された未完の草稿「メドゥーサの首」において、メドゥーサの神話を精神分析的に解釈している。フロイトによれば、斬首は去勢を意味しており、メドゥーサの切断された首はまず去勢不安を表わしている。男根を連想させる蛇もまた去勢コンプレックスを表わしている。また、見る者を石化するメドゥーサの首は処女神・アテナの盾に付けられ、男性を性的に拒絶する女性を表わすと解釈されるようになる。

メドゥーサの首は男性を去勢する恐怖の存在でありながら、男性を石化する、すなわち勃起させる存在でもある。要するに、メドゥーサの首は男性を去勢するのと同時に勃起させる存在、女性器の象徴である。以上がフロイトの主張の要約である。なお、動物について考察したジャック・デリダもフロイトの説を引用しながら、メドゥーサと去勢の関係に言及している。(4)

マクファーソンはメドゥーサ（クラゲ）によって殺される。フロイトの解釈に従えば、「ライオンのたてがみ」は男性の女性嫌悪、女性恐怖を表現した作品と言える。マクファーソンは理科の教師だが、理科・科学は当時は男性の領域であり、これに携わる女性は極めてまれであった。また、マクファーソンは水泳を好むスポーツマンでもある。つまり、マクファーソンは男性らしい男性として造形されているわけだが、犠牲者をこのように設定することで、より女性恐怖を際立たせている。

以上のように、19世紀末からゴスらの仕事によって、人々は美しく幻想的な外見と、人を死に至らしめかねない恐ろしい毒を併せ持つクラゲを知るようになった。魅力的でありながら、うかつに手を出せば命を奪われかねないクラゲは、その魅力で男を捕らえ、滅ぼすファム・ファタールを象徴するのにうってつけの存在であったのだろう。

3　男性同士の絆

コナン・ドイル自身がマクファーソンのごとき男性的な男性であった。ドイルはもともと医者であり、かつ様々なスポーツに手を染めるスポーツマンであった。ドイルは伝統的なジェンダー観をもっていた人物であり、彼の様々な作品からそのことはうかがい知れる。1910年代に高まりを見せた婦人参政権運動にもドイルは冷淡であった。つまり、ドイルはイギリス社会における女性の力の高まりに脅威を感じていたのだ。

このことは彼が創造したシャーロック・ホームズにも当てはまることで、ホームズも豊富な科学知識を有し、かつスポーツマンであった。ドイルのSF小説に登場するチャレンジャー教授もまた同様の男性で、この種の男性がドイルの理想であったことは疑いない。Joseph K. Kestnerによれば、ボーイ・スカウト運動の創始者、ロバート・ベーデン・パウエルは男性らしさ（manliness）を学ぶためにシャーロック・ホームズを読むようにボーイ・スカウトの少年たちに教えていた。ホームズ物語は男性らしさの教科書であったのだ。[5] さらにKestnerによれば、ホームズものの第１作『緋色の習作』

におけるホームズの初登場シーンが彼の科学実験室であることも、ドイルにおいては科学と男性性が結びついていることを象徴しているという。ヴィクトリア時代に発達した医学、遺伝学、動物学などの科学は、男女の性差を強固なものとし、性差別を助長したことをシンシア・イーグル・ラセットは解明しているが、[(6)]、このことも科学の担い手が男性であったからであろう。

男性性の追求は女性への蔑視につながる。ホームズの女性に関する発言には否定的なものが多い。女性を愛したことはない、と述べる（「悪魔の足」）ほか、女性は信頼できない（『四つのサイン』）とも述べる。「ライオンのたてがみ」でも、自分は理性的な人間であるから女性に惹かれたことはない、と述べている。

女性との恋愛のにおいがほとんどしないホームズの言動から、ホームズとワトソンの間に同性愛的感情を読み取る解釈も珍しいものではない。「赤毛組合」、「三人ガリデブ」といった作品がクィア理論で解釈されているが、「ライオンのたてがみ」にもそうした解釈がなされている。ドイル自身はホームズ物語に同性愛が暗示されているという見解を否定しているし[(7)]、初めは好意的な態度をとっていたオスカー・ワイルドに対しても、彼が同性愛者だとわかると反感をもつようになる。しかし、男性性の希求はホモソーシャルな空間への志向へと帰結する。男性性の希求とホモソーシャルな関係の成立は矛盾しているようにも見えるが、実はつながっているのだ。

リンダ・ダウリングはヴィクトリア時代のオックスフォード大学における同性愛を*Hellenism and Homosexuality in Victorian Oxford*で論じている。ヘレニズムへの憧憬から当時のオックスフォード大学では同性愛者が多く、その代表がウォルター・ペイターとオスカー・ワイルドである。大学という男性中心の閉じられたサークル内では同性愛が発生しやすい。マクファーソンとマードックの二人が同じ学校に勤務する教師で、自然科学や数学を教えているという設定には意味がある。そして、学校の、それも科学・数学という男性支配が著しい領域で活躍する二人の男性が一人の女性、モードをめぐって争うことになる。

イヴ・セジウィックはルネ・ジラールの研究（『欲望の現象学』）を援用しつつ、性愛のトライアングルについて考察している。セジウィックは次のように述べている。

> 性愛上の対立がいかなるものであれ、ライヴァルふたりの絆は、愛の対象とふたりをそれぞれ結びつける絆と同程度に激しく強い―つまり、彼（ジラール）によると「ライヴァル意識」と「愛」は異なる経験ではあっても、同程度に強く多くの点で等価だというのだ。（中略）性愛の三角形では、愛の主体と対象を結びつける絆よりも、ライヴァル同士の絆のほうがずっと強固であり行為と選択を決定する、というのが彼の見解のようだ。（『男性同士の絆』32ページ）

モードをめぐるマクファーソンとマードックの対立は一時は激しいものであったが、マードックはモードがマクファーソンを選んだことを知ると、二人の仲介役になることを選択する。マードックは次のように述べる。

> It is true that I loved this lady (Maud), but from the day when she chose my friend McPherson my one desire was to help her to happiness. I was well contented to stand aside and act as their go-between. (*The Case-Book of Sherlock Holmes*,191)

セジウィックによれば、男性中心の文学において男性同士がライヴァル関係にある場合、ほぼ例外なく争いの原因は女性であるという。そして、男性が女性に魅かれるのは、ライヴァルがその女性を選択しているがゆえである、としている。マクファーソンとマードックのライヴァル関係は、ジラールやセジウィックの説に従えば、モードという女性への愛情よりも強い結びつきをもっていることになる。マードックの外見的特徴としては、長身でやせ型で浅黒い肌。超然と孤高を保つと形容される彼はさながらホームズ自身のよ

うであるが、やはり男性的な存在で、これはマクファーソンにも通じる。そのマードックもまたクラゲに刺されるのだが、マクファーソンとマードックの二人は、モードに惹かれるという共通項のほかにも、クラゲに刺されるという共通の経験を有していることになる。さらに、マクファーソンを失ったマードックは、同じ学校の経営者、スタックハーストと「仲良く腕を組んで」去っていくことにKestnerは注目している。スタックハーストもまた学生時代は名の知れたボート選手であったという設定である。

このように、極めて男性的な男性たちの仲介者たるモードは美しく、非凡な女性で、女性に関心のないホームズですら注意を惹かれるほどの存在である。彼女について、ホームズは次のように述べる。

> …she（Maud）possessed strong character as well as great beauty. Maud Bellamy will always remain in my（Holmes'）memory as a most complete and remarkable woman.（*The Case-Book of Sherlock Holmes*,180）

モードは「ボヘミアの醜聞」に登場するアイリーン・アドラーを彷彿させる女性だが、アドラーはホームズすら出し抜くほどの知性と行動力をもった「新しい女」である。また、モードはマクファーソンとの結婚を認めようとしない父親に反発する自立心に富んだ女性でもある。すなわち、モードも「新しい女」であり、メドゥーサである。彼女はマクファーソンとマードックの男性同士のつながりの媒介であり、彼らを勃起させ（石化し）、彼らを去勢しかけない女性で、それがメドゥーサの名をもつクラゲに象徴されていると考えられる。マクファーソンとマードックがともにクラゲに刺されるという設定は、二人がともに異性愛者として去勢され、女性に背を向けたことを暗示しているとも解釈できる。そして、クラゲを退治するホームズは、ギリシア神話に即して言えば、ペルセウスの役割を果たしていると言え、ホームズにメドゥーサを撃退してもらったマードックは、スタックハーストとの新た

な男性同士の絆を確立する。そして､男たちのもとから去っていくモードは、男性を寄せ付けない、メドゥーサの首をもった処女神・アテナのようだ。

まとめ

このように､「ライオンのたてがみ」は学校という閉鎖的な環境を共有する男性同士のホモソーシャルな社会に、男性を誘惑し去勢する男性化女性が侵入し、それを排除することでより緊密な男性同士の絆が生まれる物語である。それがメドゥーサの名前を持つ有毒のクラゲによって象徴されている。Kestnerは本作におけるワトソンの不在も男性同士の絆の重要性を意味しているとしている。最高傑作とされる『バスカヴィル家の犬』がそうであるように、ホームズ物語ではホームズよりも先にワトソンが事件に介入するという展開が多い。「ライオンのたてがみ」では、ワトソンが登場しないことで、ホームズは積極的に関係者の人間関係に介入することはなく、ほぼ傍観者の位置にとどまっている。事件はほとんど自然に解決し、ホームズの影は薄いと言わざるを得ない。ホームズが周縁に置かれることで、マクファーソン―マードック、マードック―ストックハーストのペアが作り出すホモソーシャルな空間がより際立っている。ホームズがホモソーシャルなつながりをもつ相手はワトソンであり、ホームズはワトソンの不在を嘆いている。

男性性の追求は、男性の地位が失われることへの恐怖の裏返しである。例えば、新興国のドイツやアメリカ、日本がイギリスの権威を損ないかねないという懸念がホームズ物語には込められている。ドイツやアメリカ、日本らは、ホームズ物語ではネガティヴな文脈で登場することが多いが、それを事件解決という形で撃退し、イギリスの権威を保守するのが、イギリス的男性性の典型であるホームズである。これらは外からの脅威であるが、新しい女の脅威は、いわば内からの脅威である。1860年代からイギリスにおけるフェミニズム運動は本格的に始まったとされるが、1918年には女性に一応の参政権が与えられている。女性参政権を否定的に考えていたドイルにとって、これは女性による男性の領域の侵害であっただろう。[8]

さらには1914 ～ 1918年にかけて第一次世界大戦が発生し、イギリスの多くの若者たちが戦場に赴いていた。若い頃は自らボーア戦争に従軍したコナン・ドイルにとって、よりイギリス的男性性が求められた時代であった。このように、女性が力をもち、より男性性が必要とされた時代を背景にして「ライオンのたてがみ」は執筆されているのである。

注:

(1) Joseph A. Kestner. *Sherlock's Men: Masculinity, Conan Doyle and Cultural History.* P.200.
(2) クラゲの種については『ホームズまるわかり事典』における新野英男氏の記述を参考にした。
(3) シェリーは'On the Medusa of Leonardo da Vinci, In the Florentine Gallery' において"'Tis the tempestuous loveliness of terror"とうたっている。(Percy Bysshe Shelley. *Selected Poems and Prose*, 403.)
(4) ジャック・デリダ『獣と主権者［Ⅰ］』271ページ。
(5) Kestner, P.5.
(6) シンシア・イーグル・ラセット『女性を捏造した男たち』参照。
(7) Ayaan Agane, 'Conflations of "Queerness" in 21st Century Adaptations' p.161.
(8) 1918年には30歳以上で戸主の女性に参政権が与えられている。なお、フェミニズムと女性参政権については今井けいの『現代イギリス女性運動史』を参考にした。

参考文献:

Allan, Janice M. and Christopher Pittard ed. *The Cambridge Companion to Sherlock Holmes.* Cambridge: Cambridge University P., 2019.

Dowling Linda: *Hellenism and Homosexuality in Victorian Oxford.* New York: Cornell University P, 1994.

Doyle, Arthur Conan. *The Case-Book of Sherlock Holmes.* Oxford, New York: Oxford University P, 1993.

Farghaly, Nadine ed. *Gender and the Modern Sherlock Holmes: Essays*

on Film and Television Adaptations since 2009. Jefferson, North Carolina: McFarland, 2015.

Gosse, Philip Henry. *The Aquarium: An Unveiling of the Wonders of the Deep Sea*. London: John Van Voorst, 1854.

Graves, Robert. *The Greek Myth*. New York: Moyer Bell, 1988.

Kestner, Joseph A. *Sherlock's Men: Masculinity, Conan Doyle and Cultural History*. Aldershot: Scolar P., 1997.

Wood, John George. *Out of Doors: Selection of Original Articles on Practical Natural History*. London: Longmans, Green, and Co. 1874.

イヴ・K・セジウィック、上原早苗、亀澤美由紀訳『男同士の絆　イギリス文学とホモソーシャルな欲望』名古屋大学出版局、2001年。

今井けい『現代イギリス女性運動史　ジェンダー平等と階級の平等』ドメス出版、2016年。

コナン・ドイル、深町眞理子訳『シャーロック・ホームズの事件簿』創元推理文庫、1991年。

コナン・ドイル、小林司・東山あかね訳『シャーロック・ホームズの事件簿』河出文庫, 2014年。

小林司・東山あかね編集『シャーロック・ホームズ雑学百科』東京図書、1983年。

ジグムント・フロイト、須藤訓任、藤野寛訳『フロイト全集17』岩波書店、2006年。

ジャック・デリダ『ジャック・デリダ講義録　獣と主権者［Ⅰ］』白水社、2014年。

シンシア・イーグル・ラセット、上野直子訳『女性を捏造した男たち―ヴィクトリア時代の性差の科学』工作舎、1994年。

パーシー・B・シェリー、上田和夫訳『シェリー詩集』新潮文庫、1984年。

平賀三郎編著『ホームズまるわかり事典　『緋色の研究』から『ショスコム荘』まで』青弓社、2009年。

ブラム・ダイクストラ、富士川義之ほか訳『倒錯の偶像　世紀末幻想としての女性悪』パピルス、1994年。

マリオ・プラーツ、倉智恒夫ほか訳『肉体と死と悪魔　ロマンティック・アゴニー』国書刊行会、2000年。

ルネ・ジラール、古田幸男訳『欲望の現象学　ロマンティークの虚像とロマネスクの真実』法政大学出版局、1971年。